



につぼんの助産婦 昭和のしごと

評者・小田切 房子 (社)日本助産師会埼玉県支部長

戦後の多産の時代に活躍された助産師たちが高齢となり次々と世を去られて行くなかで、先輩の助産師からの聞き取り調査の必要性を痛感された日本助産師会の岡本喜代子副会長が、出産情報紙『リボン』の編集部の方々にその調査を依頼し、これを受けて、昭和の時代に活躍した24人の助産師からの聞き取り調査をまとめた資料集が本書である。

聞き取り調査の対象となっている24人の助産師は、北海道から沖縄まで、全国の農山漁村や東京・大阪などの都市までを網羅している。年齢はインタビュー当時で大半が80歳代であった。平成20年では多くの方が90歳以上になられ、すでに他界された方もおられる。20歳から40歳代の助産師は職業人として一番エネルギーに活動ができ、1人の女性としても妊娠・出産・育児と人生の課題に直面し、その対応に追われる時期である。

その時期がちょうど昭和10年から40年代に当たり、日本は戦中・戦後と激動の時代を迎え、人々の生活が戦争に翻弄されていた時である。24人の助産師は、その渦中をくぐり抜け、助産師職を貫いてこられた方たちである。

インタビュー内容は生い立ちをはじめ、助産師をめざした動機や経緯、開業に向けての修行、開業助産師としての活動の様子など、その助産師の歴史に軸足を置きながら、当時の人々の生

戦前から戦後の激動の時代 を生きる助産師たちの物語



REBORN 編
定価 2,800 円
A4判/REBORN/2008 年

活や人とのつながりの様子、出産・育児にまつわる風俗習慣、さまざまな出産模様など、多岐にわたりインタビューされている。

資料集としてまとめるに当たり、「先輩助産師それぞれの言葉と仕事を、できるだけ編集せずにそのまま残すこと」をコンセプトにされているためか、1人ひとりの助産師の思いや考え、仕事ぶりが、読み手にその助産師の生の声と言葉で伝わり、息遣いまでも伝わって来るようで、リアルな躍動感を覚える。

1人ひとりの人間模様の描写を丁寧にいきいきと映し出し、見る者に深い感動を与える黒澤

明監督の映画作品に通じるものを感じさせられる。また、注釈や関連文献も掲載されており、インタビュー内容を深め、発展して活用できるように編集に工夫がされている。

助産師としてのアイデンティティ、哲学、そして、出産介助の原点など、助産師の核となる大切な部分が語られている一方において、その当時の生活模様も具体的に語られており、情報が豊かにちりばめられていることから、さまざまな切り口で活用できる資料集である。

助産師をはじめ、助産学、看護学領域の学生・教員・研究者はもとより、文化人類学、社会学、民俗学、女性学などを専門領域とされる方々にも、資料の宝庫である本書をぜひ一読されることをお勧めしたい。